

2025 受難週 祈りの課題

14日(月) マタイ21:1-10 エルサレム入城(ちいろば)

エルサレムに入るイエスの姿が描かれる。人々は「ホサナ(救いたまえ)!と叫び、王様の象徴である棕櫚の葉を振って迎えた。“王さまバンザイ!”ということである。しかしその姿は“王さま”と呼ばれるにはあまりにも弱々しいものだった。イエスは力強い軍馬にではなく、ロバの子に乗って進んで行かれた。力や強さによって救いをもたらすのではなく、弱さを絆につながり合うことが救いにつながってゆく…。ロバの子に乗って進むイエスの姿はそんなことを表している。

イエスを乗せて進んだロバの子にも注目したい。大きな力を出せないロバの子。でもその小ささ・弱さをイエスは用いられた。「わたしはこんなことしかできません」と拒むのではなく、「こんなことならできます」と受け入れること。それがイエスに従って生きる上で大切なことなのだ。

15日(火) マタイ23:37-24:2 エルサレムへの嘆き~神殿崩壊予言

古の昔より「神の都」と呼ばれたエルサレム。しかしその姿は神の祝福からは遠くはずれたものだった。過ちを犯す者に忠告を与える預言者たちを逆に弾圧し、神から遣わされたメシアを殺そうとする宗教指導者たち。そんな人々に牛耳られた神殿の姿をイエスは嘆かれる。

弟子たちは神殿の見事な建物を見て感嘆の声をあげた。しかしイエスは、「どんな立派な神殿であっても、いつかは崩れ去る」と予言される。形あるものはいつかは壊れる。イエスの眼差しは、いつも根源的だ。

イエスはエルサレムを憎んでおられたのか?いや、そうではなく、本当は心から愛しておられたのではないか。愛しておられたからこそ、神のみこころから外れてしまったその姿を痛切に批判し、心から嘆かれたのだ。

16日(水) マタイ26:1-16 カイアファ・マリア・ユダ

十字架に向かうイエスの周りの、3人の人物・三者三様の姿が描かれる。①カイアファ。宗教指導者の頂点である大祭司の一人である。彼はなぜイエスを殺そうとしたのか。それはイエスによって「メンツ」をつぶされたと感じたからだ。神の真実よりもメンツを優先する。そんな人の姿である。②ユダ。イエスを裏切り大祭司たちに引き渡す手引きをした、イエスの弟子である。彼はなぜ裏切ったのか。マタイは金目当てであったと記している。金に目を眩ませられる悲しい人間の一面がユダに象徴されている。③マリア。マタイ伝では「ひとりの女」と記される。イエスに高価なナルドの香油を注ぎかけた。その心の奥底にあったのは、イエスへの感謝である。メンツや金(財力)ではなく、感謝と敬意をもって人とつながる時、そこに真実な交わりが生まれる。

17日(木) マタイ26:17-46 最後の晩餐・ゲッセマネの祈り

弟子たちとの最後の晩餐、パンをイエスの身体、ワインをイエスの血として分かち合う振る舞いは、聖餐式として受け継がれてきた。どこか「美しい出来事」との印象が残る。しかしその席上でなされたのは、ユダの裏切りへの告発、ペトロの離反の予言であった。それは単なる美しい物語ではなく、人間の罪への指摘である。

ゲッセマネで祈るイエスの姿は、祈りの真髄を私たちに示す。「この杯(苦難の死)を取り除けて下さい」とイエスは赤裸々に祈られた。私たちと同じひとりの生身の人間の姿である。しかしイエスは、「わたしの思いではなく、みこころが行われますように」と、最後は神に委ねられるのである。自分の中にある赤裸々な願いと、神の御心への委ね。その間に生まれる言葉が真の祈りである。

18日(金) マタイ26:47-75 逮捕・裁判・ペトロの裏切り

逮捕されてからのイエスは、偽証や不利な証言があっても、何の弁明もせず、命乞いもせず、淡々と静かに裁きに向き合われる。その心の中にあっただのはどんな思いだろうか。自分の思いを中心に置く時、このような振る舞いは難しい。神の思いにすべてを委ねる時、このような静かさが与えられるのかも知れない。

一方、裁判を遠巻きに見ていたペトロは、「お前もあいつの仲間だろう?」との追及に、ついイエスとの関わりを否定してしまう。一時はイエスの元で崇高な理念を抱いた。そう思い込んでいたペトロ。しかし人間の弱さはその理念を簡単に打ち砕く。けれども鶏の鳴く声を聞いて自分の罪を悟ったペトロは、外に出て激しく泣いた。この涙こそ、彼の新たな歩みの出発点だ。人間は弱いから罪を犯してしまう。それは仕方がない。大切なのは、その自分の弱さを知った時、外に出て激しく泣けるかどうかである。